「ポケットの縫い目」

埼玉県　清水友里江

私は両親が働いているために、近くに住む祖父母のところで過ごすことが多かった。小さい時の思い出といえば祖父母と一緒に店番をしたことである。祖母はお店に来るお客さんと話をするのが大好きでいつも誰かと話をしていた。働き者でじっとしていることがなく、店が暇な時は畑仕事をしていた。私はそんな祖母のそばにいつもいた。

小学校二年生の時のことである。洋服のポケットに入れておいたはずの友達からもらったキーホルダーがなくなってしまうという事件が起こった。全く祖母のせいではなかったのだが、祖母にあたってしまった。泣きながら祖母のせいにして悪態をついたのを覚えている。優しい祖母は決して怒ることなく私の言うことを聞いていたように思う。もう暗くなりかけていたが、その日通った道を祖母と、手をつないで捜しに行ったのを覚えている。帰ってきて、祖母とよく見ると、ポケットがほつれて穴があいていたのだ。

祖母は半年後に病気で亡くなってしまい、キーホルダー事件があったことなどすっかり忘れていた。

しかし、次の年またあの服を着る季節が来た。そしてあの事件を思い出し、ポケットに手を入れた。すると、ポケットが縫って直してあったのだ。白い太い糸でしっかりと縫ってあった。祖母が直してくれていたのだ。あのあと祖母がそっと縫ってくれていたのだ。その白い大きくしっかりした縫い目が祖母と重なり、涙が出た。「ありがとう、おばあちゃん」という気持ちでいっぱいだった。もう何年も前のことだが、あの時の気持ちは今も忘れることはない。あの縫い目は、祖母の優しさ、強さ、愛情全てを表していたように思う。

その洋服はもちろん、もう小さくなって着ることはない。しかし、タンスの中と私の心の中に大事にしまってある。

Copyright(C) THE JAPAN WOOL TEXTILE CO., Ltd. All Right Reserved.